

論文の内容の要旨

論文題目：

The Acquisition of the Discoursal Properties of English Relative Constructions by Japanese Learners

(日本人学習者による英語関係節構文の談話特徴の習得)

氏名 奥切 恵

本研究は、日本人学習者の英語関係節構文の習得を談話的観点から考察し、談話特徴が関係節構文の習得において大きく影響していることを明らかにすることを目的とする。過去の英語関係節構文の習得における多くの研究は、その統語要素のみに注目した研究が多く、談話の観点から研究したものは少ない。本研究では、日本人学習者の英語関係節構文の談話特徴を習熟度別に分析し、話し言葉と書き言葉での比較、また英語母語話者と学習者の比較も行った。分析対象とした関係節構文の談話特徴は、先行詞の有生性 (Animate (有生) / Concrete Inanimate (具象無生) / Abstract Inanimate (抽象無生)) (Ming & Chen, 2010) と情報の新旧(New (新情報) / Identifiable (識別可能情報) / Given (旧情報)) (Chafe, 1980, 1987; Du Bois, 1980), 旧情報を談話に導入する際、文章のどの位置に導入

されるかという grounding の種類 (Anchoring (関係節内の名詞句の 1 つ) / Main-Clause Grounding (主節内の名詞句の 1 つ) / Proposition-Linking (関係節全体の命題) / Adverbial-Main (主節内の副詞句) / Adverbial-RC (関係節内の副詞句) / Other (該当なし)) (Fox & Thompson, 1990 参照), そして関係節の機能 (Characterisation (特徴) / Identification (識別)) (Fox & Thompson, 1990)である。

本研究では、用法基盤モデルに基づき、学習者の実際の第二言語産出に着目し、関係節構文の習得を分析した。データは、日本人学習者の話し言葉と書き言葉コーパスから抽出した。使用したコーパスは『日本人 1200 人の英語スピーキングコーパス』(和泉, 井佐原, 内元 2005) (話し言葉コーパス) と『日本人英語学習者コーパス NICE』(杉浦 2008) (書き言葉コーパス) の二つである。関係節構文の産出において、トピックの影響を抑えるため、トピックごとのファイル数を統制した。さらに学習者の習熟度を TOEIC の得点によって初中級 (Low-Intermediate) / 中級 (High-Intermediate) / 上級 (Advanced) に分類した結果、話し言葉コーパスからは 123 名の初中級学習者, 241 名の中級学習者, 219 名の上級学習者, 20 名の英語母語話者, 書き言葉コーパスからは 37 名の初中級学習者, 32 名の中級学習者, 25 名の上級学習者, 28 名の英語母語話者, 以上合計 725 名のファイルから関係節構文を抽出した。抽出された関係節構文の数は、話し言葉コーパスからは初中級学習者が 48, 中級学習者が 279, 上級学習者が 637, 英語母語話者が 527, 書き言葉コーパスからは初中級学習者が 64, 中級学習者が 105, 上級学習者が 130, 英語母語話者が 208, 以上合計 1998 であった。

本研究の結果では、先行詞の有生性と情報の新旧, そして関係節の機能において学習者と英語母語話者の間には、統計的に有意な差がみられた。英語母語

話者は、一般的な英語での談話内にみられるように、関係節を使用する際にも斜格名詞句に新情報をおき、関係節の先行詞とする傾向がみられた(例: We went cross country skiing and walked *on snow shoes* which are like tennis rackets you walk on.). 一方学習者においては、特に習熟度の低い学習者は一般的な日本語の談話内でみられるように、目的格名詞に新情報をおき、英語関係節の先行詞とする傾向が強いことが分かった(例: I meet *many friends* who are my classmates. (初中級学習者)).

有生性に関しては、英語母語話者は関係節を産出する際、話し言葉では具象無生(例: a building, eggs), 書き言葉では抽象無生(例: ideas, issues)の名詞句が先行詞になる傾向があった。一方学習者は英語関係節を使用する際、特に書き言葉では有生の名詞句(例: people, person)が先行詞になる傾向があることがわかった。さらに習熟度の高い上級学習者は話し言葉と書き言葉の両方で、有生の名詞句が先行詞になる傾向がみられた。これは、学習者が特定の人物や特定層の人(々)を他の人(々)と識別するために(例: the person who get the penalty), 関係節構文をコミュニケーションストラテジーの一つとして使用していることが考えられる。この現象が上級学習者に強くみられたのは、習熟度の高い学習者の方が文法的に複雑な関係節構文を思い通りに産出できることが一つの原因と推測される。

Grounding と関係節の機能においては、英語母語話者と学習者の間にそれほど大きな違いはみられなかったが、英語母語話者、学習者共に、書き言葉において Identification (識別)として機能する関係節が顕著に多く産出されることがわかった。これは一般的な話し言葉では視覚的・直示的情報が存在するのに対し、

書き言葉ではそれらが不在であることが一つの原因と推測される。特に学習者は英語母語話者に比べ、話し言葉においても **Identification** (識別) の産出が多かった。これは、英語母語話者は語彙数が多く、関係詞のみならず様々な種類の名詞句によって同じ物や人を表現できるが、学習者は概して語彙数が少なく、特定の人(々)を表すために関係節をパターン化して一つの名詞句として使用しているためであると考えられる。またこの場合、**grounding** の関係節全体の命題を表す **Proposition-Linking** が多く使われている事がわかったことから、学習者が繰り返し同じ人物を表すワンパターンな関係節構文を産出する傾向があることもわかった(例: **the person who get the penalty** を繰り返し産出する等)。

本論文の結果から、第一言語習得だけでなく、第二言語習得においても先行詞の有生性と情報の新旧、また関係詞の機能といった談話特徴が関係節構文の産出に大きく影響していることが明らかになった。また **grounding** の種類も、談話特徴の傾向を反映していることがわかった。従って、構文の習得を談話の側面から研究することは、第二言語習得の分野において大きく資すると考えられる。また本研究の結果は、言語教育の現場においても単なる統語的な文法の教育だけでなく、話し言葉と書き言葉の違い、結束性、また談話特徴の言語間における相違点など、談話要素を反映した指導が今後の言語教育に生かされることのメリットを示唆している。

参考文献

- 和泉 絵美, 井佐原 均, 内元 清貴 (2005) 日本人 1200 人の英語スピーキング
コーパス 東京 : アルク.
- 杉浦正利 (代表) (2008) 「英語学習者のコロケーション知識に関する基礎的
研究」平成 17~19 年度 科学研究費補助金 (基盤研究 B) 研究成果
報告書, 課題番号 17320084.
- Chafe, W. (1980). The deployment of consciousness in the production of a narrative. In
W. Chafe (Ed.), *The Pear Stories: Cognitive, Cultural, and Linguistic Aspects of
Narrative Production* (pp. 9-50). Norwood, NJ: Ablex.
- Chafe, W. (1987). Cognitive constraints on information flow. In R. Tomlin (Ed.),
Coherence and Grounding in Discourse (pp. 21-51). Amsterdam: John
Benjamins.
- Du Bois, J. (1980). Beyond definiteness: The trace of identity in discourse. In L. Chafe
(Ed.), *The Pear Stories: Cognitive, Cultural, and Linguistic Aspects of Narrative
Production* (pp. 203-274). Norwood, NJ: Ablex.
- Fox, B. A., & Thompson, S. A. (1990). A discourse explanation of the grammar of
relative clauses in English conversation. *Language*, 66 (2), 297-316.
- Ming, T., & Chen, L. (2010). A discourse-pragmatic study of the word order variation
in Chinese relative clauses. *Journal of Pragmatics*, 42 (1), 168-189.